

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：30107

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25380660

研究課題名(和文)教師の働きかけと授業会話の秩序における学習経験の組織化

研究課題名(英文)Organization of learning experiences in classroom interaction and conversational order

研究代表者

五十嵐 素子(IGARASHI, MOTOKO)

北海学園大学・法学部・准教授

研究者番号：70413292

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果として(1)一斉授業の会話の秩序と生徒の学習経験の関係に関して、一斉授業において授業会話を支える「公的な発言」が成り立って進行していることを指摘し、そこでは教師と生徒が協同的に「公的」な発言と「公的でない」発言を発言の仕方のなかで管理していることを明らかにした。(2)また教師の働きかけと学習経験との関係に関しては、授業における教師の知識の教示の仕方と生徒の学習経験の間には内在的な関係があり、教師によって教示された行為の基準が、生徒自身の学習過程を支え、生徒の学習の達成を理解可能にしていることを具体例をもとに明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Firstly, we point out that “formal” replies are constructed in a classroom interaction. Students in various roles in the classroom often spoke out without being invited to do so by the teacher. Some have been designed in a manner which could be taken up as formal replies, whereas some were such that they did not need to be addressed. In the result, “formal” classroom conversation is to be maintained in a classroom. Secondary, we show that teacher’s assessments are designed to make visible assessment criteria based on the measurement system. So, assessment is not only for testing student’s abilities but also shows the criteria and measurement system for it, which is available for training by students. Therefore how teacher’s assessments are designed could be interrelated to how students learn.

研究分野：教育社会学

キーワード：会話分析 エスノメソドロジー 学習経験 相互行為 授業会話

1. 研究開始当初の背景

日本における教育実践の質的研究は近年特に盛んになりつつあるが、学習活動の流れや会話・相互行為の特徴(パターンなど)のみに着目するものがほとんどである。

本研究では、それらとは異なって、学習活動のあり方と学習経験の間での内在的な関係を論じる視点を持つことができる。

これは申請者がウィトゲンシュタイン派エスノメソドロロジーの方法論的研究を続けてきたことによって可能になったものである。そのことで、学習経験の質や、それを可能にする教師の働きかけの方法、そこで必要となる相互行為秩序について明らかにすることができる点が、他の研究と差異化される研究方法としての独創的な点であると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、社会学のエスノメソドロロジー・会話分析の方法論に基づき、授業の学習経験が相互行為上で組織化されるという視点を採用し、学習活動の設計(デザイン)に結びついた教師の働きかけの方法と授業の相互行為の秩序としての会話のルールが、児童・生徒の学習経験の組織化にいかに関わっているのかを明らかにすることを目的とする。また、その分析方法論についても示していく。

3. 研究の方法

これまでの調査で得られた学習活動のビデオデータに基づいてエスノメソドロロジー・会話分析の手法を用いて研究を進めていく。まずこれまで得られたデータのなかでも、低学年の比較的ゆるやかに設計された様々な形式の学習活動を検討し、教師の働きかけの方法とそこでの学習経験・教授知識の組織化のあり方についての典型例を抽出・分析する。また一斉授業に関しても、そうしたデータにおいて典型的な会話のルール(挙手、非対称な順番交替、IRE シークエンスなど)について検討する。

最終的には以下の4点に焦点を当てて知見をまとめる。

(1) 一斉授業の会話の秩序と生徒の学習経験の関係について

(2) 教師の働きかけと学習経験の関係について

(3) 協同学習を考察する視点に関して

(4) その他分析方法論について

4. 研究成果

研究成果を、上記の区分に沿って年度毎に記す。

[平成25年度]

(1) 一斉授業の会話の秩序と生徒の学習経験の関係に関して：一斉授業において教師と生徒の間の「授業会話」が進行していく際には、双方の交渉において「公的な発言」が管理されていることをIRE連鎖の構成のされ

方を例に明らかにした(9月、社会言語科学会研究大会)。こうした「授業会話」の進行に生徒が積極的に参加していくにあたっては、会話の連鎖の予測可能性が資源になる。そこで、IRE連鎖の教師の発問(1)がその後の連鎖の予測可能性を持つケースを検討し、それがどのような文脈や発話デザインによって支えられているのかについて論じた(10月、日本社会学会大会)。

(2) 教師の働きかけと学習経験との関係に関して：「学習」という現象そのものについて、それがいかなる教師と生徒のやりとりのなかで公的に理解可能なものとして示されているのかについて、具体例をもとに知見を発表した(8月、国際エスノメソドロロジー・会話分析学会)。

(3) 協同学習を考察する視点に関して：ICTを活用した協同学習の授業を例として、道具利用の選択肢や役割分担の配分が、生徒の資質や能力に適合した形で協働性を維持するという点で、設計上重要であることを示した(9月、社会情報学会大会)。

[平成26年度]

(2) 教師の働きかけと学習経験との関係に関して：個々の子どもの学習の過程において、授業において教示された評価基準がどのように用いられ、自身の学習の理解へとつながっているかという点について発表した(9月、日本教育社会学会大会)。

(4) 分析方法論に関して：エスノメソドロロジー・会話分析研究における教示の理解可能性とその利用可能性に関わる先行研究を概観し、具体的な事例でその考え方を深めた(11月、日本社会学会大会)。

[平成27年度]

(1) 一斉授業の会話の秩序と生徒の学習経験の関係に関して：授業の会話の秩序(連鎖)の進行を予測しながら、生徒らが授業会話に組み込まれうるようなデザインで発言し、またそうした発言を教師が取り込んでいくことで、授業会話が秩序だって進行していることが明らかになった(8月、IEMCA2015)。

(2) 教師の働きかけと学習経験との関係に関して：授業における教師の知識の教示の仕方と生徒の学習経験の間には内在的な関係があり、教師によって教示された行為の基準が、生徒自身の学習過程を支え、生徒の学習の達成を理解可能にしていることが示された(「『教示』と結びついた『学習の達成』」)。

(3) 協同学習を考察する視点に関して：エスノメソドロロジーのワークの研究の潮流をくんだ、コンピューター支援による協同学習(CSCL)の研究の視点は、近年では学習科学の一つの研究アプローチとなっている(9月、日本社会学会)。このアプローチが協同学習における生徒の学習経験を捉える視点となることを示した(6月、子ども社会学会)。

(4) 分析方法論に関して：沈黙を行為と

して分析する視点を提示することができた（『『絶句』の会話分析』）。身体的動きやジェスチャーをどう会話と関係づけて捉えるかという問題について視点を提示し（7月、社会言語科学会）、具体的な事例分析を行った（「環境を作り出す身振り」）。

[平成28年度]

(1) 一斉授業の会話の秩序と生徒の学習経験の関係に関して：一斉授業の会話の秩序に関する先行研究について、集団の管理と社会化過程の観点から国内外の研究の整理を行った（9月、教育社会学会）。

(2) 教師の働きかけと学習経験との関係に関して：会話分析の国内外の先行研究について授業における教師の知識の教示の仕方や生徒の学習経験の観点から整理した（10月、日本教育方法学会）。

(3) 協同学習を考察する視点に関して：コンピューター支援による協同学習（CSCL）の研究の視点は、近年では学習科学の一つの研究アプローチとなっており、このアプローチを用いて中学校の協働学習の場面を分析しそこでの生徒の学習経験について論じた（2月、「ICTを活用した協働学習のデザインと生徒のワーク」）。

(4) 分析方法論に関して：他者開始の修復連鎖において、参加者がその場である常識的知識を「知らない」ことがどう表され、扱われるかを明らかにし、ある知識がないことが焦点化される場面を分析する一視点を提示することができた（6月、「物を知らないことの相互行為的編成」）。

[平成29年度]

(3) 協同学習を考察する視点に関して：エスノメソドロジー・会話分析の成員カテゴリー化装置の知見を分析視点として援用することで、協同学習の展開の円滑さや教師の支援の必要性などについて明らかにすることができることを、具体例を考察することで示すことができた。（9月、日本質的心理学会）

（9月、『『何をどう学ぶか』をデザインするためのエスノメソドロジー研究の視点』）（9月、「立場を異にする者同士のかかわりの質的記述」）

なお、成果発表のための著作の出版に関して、打ち合わせと研究会を通じて、執筆作業を進めることができた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

[雑誌論文]（計5件）

五十嵐素子「『何をどう学ぶか』をデザインするためのエスノメソドロジー研究の視点：『対話的な学び』はいかに『立場の違い』を通じて生まれるのか」『質的心理学フォーラム』9、35-44、2017年、査読有

平本毅「『絶句』の会話分析」立命館産業社会論集51(1)、239-254、2015、査読有
http://www.ritsumei.ac.jp/ss/sansharons/asset/file/2015/51-1_03-20.pdf

平本毅「環境を作り出す身振り：科学館新規展示物制作チームの活動の事例から」

『認知科学』22(4)、557-572、2015年、査読有

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jcss/22/4/22_557/pdf

平本毅「物を知らないことの相互行為的編成」『フォーラム現代社会学』15、3-17、2016年、査読有

https://www.jstage.jst.go.jp/article/ksr/15/0/15_3/article/-char/ja/

平本毅・谷美奈・川嶋理恵「立場を異にする者同士のかかわりの質的記述」『質的心理学フォーラム』9、5-13、2017年、査読無

[学会発表]（計13件）

Motoko IGARASHI “Account of action as learned: Embodied criteria in an action organization” 2013 IEMCA Conference
2013年8月

五十嵐素子「授業における学習の達成：教示で示された行為の基準とその利用の視点から」日本教育社会学会第66回大会、2014年9月

五十嵐素子「教示作業の組織化のデザイン：学習者による利用可能性の視点から」第87回日本社会学会大会、2014年11月

五十嵐素子「メディアを用いた協働学習のデザイン：エスノメソドロジー研究の視点から」子ども社会学会第22回大会、2015年6月

五十嵐素子「授業秩序とその管理の諸相：エスノメソドロジー・会話分析の知見から」第68回日本教育社会学会大会、2016年9月

五十嵐素子「教授場面における会話の進め方の特徴：授業の相互行為分析の知見から」日本教育方法学会第52回大会、2016年10月

五十嵐素子「『何をどう学ぶか』をデザインするためのエスノメソドロジー研究の視点：『対話的な学び』はいかに『立場の違い』を通じて生まれるのか」日本質的心理学会第14回大会、2017年

五十嵐素子、秋谷直矩、水川喜文
「ワークプレイス研究のエスノメソドロジー的展開(3)：協働学習のエスノグラフィ

から学習の実践学へ」第 88 回日本社会学会
大会、2015 年 9 月

五十嵐素子・笠木祐美「教育実践における
メディア利用のデザイン：ICT を活用した協
働的な学びの事例から」2013 年社会情報学会
大会、2013 年 9 月

五十嵐素子・平本毅「授業場面における
“IRE”連鎖開始部の認識可能性について」
第 86 回日本社会学会大会、2013 年 10 月

Motoko IGARASHI, Takeshi HIRAMOTO
“ ‘Formal’ Replies as Constructed in a
Classroom Interactional Order ” The
International Institute for
Ethnomethodology and Conversation
Analysis International Conference 2015(国
際学会) 2015 年 8 月

平本毅「会話分析研究におけるマルチモダ
リティ概念の使用について」社会言語科学会
第 36 回大会、2015 年 9 月

平本毅・五十嵐素子「授業の相互行為秩序
と『公的』な発言の構成」第 32 回社会言語
科学会研究大会、2013 年 9 月

〔図書〕(計 2 件)

五十嵐素子「『教示』と結びついた『学習
の達成』：行為の基準の視点から」酒井泰斗・
浦野 茂・前田泰樹・中村和生・小宮友根
(編)『概念分析の社会学 2』ナカニシヤ出
版、177-194、2016

五十嵐素子・笠木祐美「ICT を活用した協
働学習のデザインと生徒のワーク：中学校の
授業実践を例として」『ワークプレイス・ス
タディーズ：はたらくことのエスノメソドロ
ジー』、258-277、2017

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1) 研究代表者
五十嵐 素子 (IGARASHI Motoko)
北海学園大学・法学部・准教授
研究者番号：70413292

(2) 研究分担者
平本 毅 (HIRAMOTO Takeshi)
京都大学・経営管理大学院・特定講師
研究者番号：30469184

(3) 連携研究者
()

研究者番号：

(4) 研究協力者